

奈良・稗田遺跡―下ッ道―

- 1 所在地 奈良県大和郡山市稗田
- 2 調査期間 一九八〇年(昭55) 九月～一九八一年二月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 伊藤勇輔・中井一夫・泉 武
- 5 遺跡の種類 道路・運河
- 6 遺跡の時代 奈良時代～平安時代初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(桜井)

稗田遺跡は、昭和51年に県営稗田団地造成に先立つ遺構有無確認調査によりその存在が確認され、この後の調査により古墳時代後期の水田跡と平城京の都市計画にかかわると考えられる人口河川を検出した。この河川はその流路復元より平城京東京極を通り、同東南隅部あたりよりその方向を条里に対して約45度の傾きをもって盆地底部に向って流れているもので、今回の

調査はこの流路と下ッ道との交差点にあたる地点である。

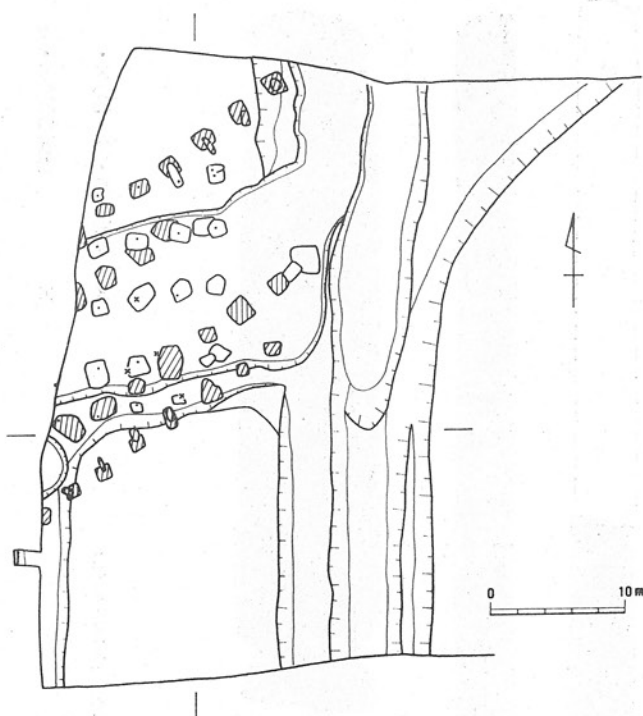
検出された下ッ道は、道路幅16m・東側溝幅11m・西側溝幅4mの規模を持ち、旧来の推定位置の正しかったことが証明されたが、東側溝が単に側溝としての規模をはるかにこえた大規模なもので、その底のレベルも本流と考えていた既述の流路よりも深く、水路としてもこれの方が重要であったと考えられ、下ッ道が道路以外に水路を用いた水運をも兼ねそなえたものであった可能性が考えられる。この下ッ道を横切る既述の川は、その流路を下ッ道部分においてのみその角度を道路にできるだけ直交させるようにしていたが完全に直交はしていない。流路幅は、以前に調査した下流部と同じで幅約20m・深さ約1.5mを計る。川岸部ならびに川内には径約50cmの檜の柱が約20本遺存しており、この川に架けられた橋の橋脚であると考えられる(図)。橋の中心線は道路中心線とは一致しないが、橋脚のならばは道路と並行している。この橋に先行する古い橋の橋脚掘形も存在し、これは道路幅いっぱい橋が架けられており、その西端の脚は西側溝中心部にあることから、この時期には西側溝が存在していなかった可能性がある。この橋周辺には、護岸・流路調整のためのシガラミが多く造られており、木簡はこれらシガラミの周囲に堆積した植物遺体を多く含む土層より出土した。このシガラミ周辺以外の川内堆積層は砂ばかりである。上層では饒益神宝が含まれる層があり、この川の最終時期を知ることができ、木簡は中層以

1980年出土の木簡

下で検出された。(1)～(8)・(10)・(11)・(13)は橋脚周辺部で出土し、このうち(1)は古い橋脚の抜き取り穴の上部を覆った層中から出土していることから古い橋の時期を知る資料となるであろう。(9)・(12)は東側溝中より出土している。

8 木簡の釈文・内容

木簡は墨付だけのものや、習書木簡を含めると18点を検出した。



稗田遺跡遺構配置図

(1)	〔右カ〕 衛士府移〔入カ〕府〔又〕〔旨カ〕	344×(15)×6 011
(2)	〔大田マ〕〔箸麻呂カ〕 隠地郡 日下マ〔荒次カ〕 海藻	147×31×3 031
(3)	〔衛士府カ〕 〔多比連〕〔阿連〕〔万呂〕	207×39×6 032
(4)	〔幡麻國〕〔耳カ〕 企郡	(115)×39×3 019
(5)	〔安カ〕 〔国〕	(99)×32×3 039
(6)	〔凡〕〔伊〕〔春〕〔高〕 〔万呂〕〔万呂〕〔万呂〕	(107)×24×4 019
(7)	五〔人〕六	(87)×15×2 081
(8)	〔書〕	(64)×(15)×3 081

(9) × 二九十八 □ □ ×

(143) × (16) × 2 081

(10) ・ □ □ □ □ □ ×

(13) ・ □ ×
・ 「御・津・脚等の習書」 ×

(246) × 25 × 2 019

・ 「□ □ □ □ □ □ 比
〔野カ〕 ×

(187) × (17) × 4 019

(11) ・ × □ □ □ □ □]

・ × □]

(93) × (10) × 2 081

(12) ・ × (散の習書) ×

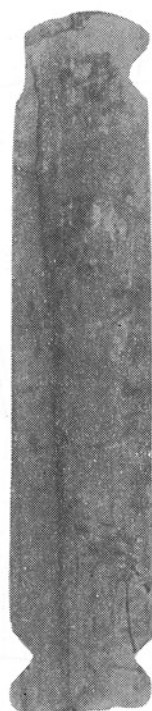
・ × (鳥・食・根の習書) ×

(35) × (29) × 1 081

9 関係文献

〔稗田遺跡発掘調査概報〕(奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報』一九八〇年度)
(6)は上部中央に径約5ミリの穴があげられている。(8)は材を横に使用している。(11)の下端はするどく斜めに切断されている。

付記 木簡解説については橿原考古学研究所、和田萃氏にお願いしたものである。
(中井一夫)



木簡(2)



木簡(1)表



木簡(1)裏